

## 体腔内の新生物・腫瘍 (mass) を見つけたら

1、どのような時に見つかるか

### ①胸腔内

症状：呼吸が荒い、咳が出る、チアノーゼ

診察：聴診、X線検査、超音波検査、CT/MRI検査

### ②腹腔内

症状：お腹が膨れてきた、お腹が張っている

診察：触診、X線検査、超音波検査、CT/MRI検査

2、新生物が見つかったも→腫瘍とはかぎらない

腫大、炎症、腹水/胸水、嚢胞、膿瘍、水腫・浮腫

異物、脂肪、肉芽腫、脂肪織炎、良性新生物、腫瘍・・・

→これは何だろうか？ 身体全体への影響は？ 合併症/随伴症候群は？

できるだけ、負担やリスクの少ない方法で診断は可能か

血液一般/化学検査、CRP検査、X線検査、超音波検査

血液凝固系検査、心電図検査

⇒全身の仮診断と体調・病状の把握

3、仮の診断が出来ても→massは何か？どんな性質か？が重要

症状と上記検査から予測をする

細針吸引生検：細胞診⇒massの仮診断

⇒mass自体の仮診断

ここまで行わなければ、治療法も予後の判断も出来ない

\*どんな疾患でも、特にmassでは、しっかりと把握しない限り軽々しくものは言えない

4、腫瘍だと分かって→悪性腫瘍（癌/肉腫）とはかぎらない

仮診断以上の確定診断が必要か？

今の診断で治療法の決定や実施、予後の判定が可能か？

→可能であれば、治療開始

→さらに確定診断が必要な理由およびそのメリット/デメリットを検討

CT/MRI 検査にて可能な限りの診断および病状や合併症/随伴症候群の細かい把握  
切除生検/完全切除手術：病理組織検査

5、仮に腫瘍であるとして→容体が急変するあるいは予後不良とはかぎらない

体調と病状、腫瘍の性質に合わせて治療法を検討

早期発見/早期治療で治癒も見込める

年齢は、腫瘍治療の方法決定の根拠とはならないが、1つの因子ではある

あくまで、体調と病状から判断する

外科手術が主な治療法だが、全身麻酔も含め、メリット/デメリットの評価が重要

姑息的手術：完治が望めなくても、緩和治療や危険の回避に効果があることも

腫瘍の治療3大要素：外科手術 化学療法 放射線療法

第4の治療法：免疫治療（細胞移入療法、幹細胞移植、インターフェロン、サプリメント等）

ホスピス/緩和治療：楽にすること、経過をマイルドにすること、痛みをとることは大事

6、腫瘍の怖さは、腫瘍だけの問題ではない→合併症/随伴症候群が怖い

腫瘍による機能障害、痛み

腫瘍やリンパ節の拡大による諸臓器の圧迫、機能障害、痛み

腫瘍の浸潤による腫瘍の進行、病状の悪化、多臓器不全、癒着

遠隔転移による腫瘍の進行、病状の悪化、多臓器不全

腫瘍の存在による体調不良、多臓器不全

胸水/腹水

出血、血液凝固障害、DIC、消化器障害

腫瘍からの出血、腫瘍の破裂